**古典学習陶冶会会員のための経済・経営講座　第７回「環境整備（1）」**

**古典学習陶冶会会長補佐　志水達也税理士事務所所長　志水達也**

経営者は経営理念に裏打ちされた矛盾のない明確な目的を持ち、経営計画書によって全従業員に周知し、「有言実行」しなければならない。経営理念は、古典を学ぶ→心が耕される→気づきが得られる→座右の銘に出会う→信念・哲学が形成される→経営理念が構築されるというルートをたどる以外には樹立できない。以上が前回のテーマでした。

この経営理念から目的が生まれるのですが、市場経済を前提とする限り、ここで生まれる第一の目的は「お客様第一主義」を意味するものになるはずです。何故なら、企業活動とは、市場においてお客様を奪い合う活動に他ならないからです。「お客様第一主義」には、様々な表現の仕方があります。例えば、よく見かける「三方良し」や「ＣＳ経営」等も、結局は「お客様第一主義」を表現する一つのバリエーションといえます。

経営計画書の目的として、「お客様第一主義」を意味するものを掲げるのは当然として、あまり知られていない、もう一つの欠かせない目的があります。それは、福沢諭吉が『学問のすすめ』で商売成功のコツとして述べている、「商売に一大緊要なるは平日の帳合を精密にして、棚卸の期を誤らざるの一事なり」のことです。第３回ではこの一文を損益計画書のことと解説しましたが、この一文は商店の棚の「環境整備」とも理解できます。

経営コンサルタントとして根強いファンの多い一倉定氏は、「環境整備」の重要性を「精神革命である」と強調しています。つまり、「環境整備を一日一時間正しく行うと社員の人間性がまったく変わり、品質も生産性も向上する」というのです。同様に、陶冶会学びの本『掃除と経営』（大森信）には、大阪商工会議所が行ったアンケートの結果として、環境整備を行う前と後で、機械の耐用年数や、売上が向上した事実が紹介されています。では、環境整備がどのように精神に影響するのか。この本によれば、環境整備を行った当初は、「自分のために掃除する（自力）」だけだった社員に、次第に「他人のために掃除する（利他）」という意識が芽生え、最後には「誰のためでもない無欲の掃除(他力)」となるそうです。

ここで、「他力」とは何かについては説明が必要です。陶冶会学びの本『歎異抄（NHKテキスト）』によれば、「弥陀の誓願を信じて、念仏すれば、往生できる」という考え方が他力（本願）です。つまり、救われるのは、自分の努力によるのではなく、弥陀の力を信じるからであり、自分の努力など関係ないということです。このような考え方では、努力する人が減ってしまいそうですが、そこは人間の精神の不思議なところで、他力思想の方が、信者が増え、組織化ができ、結果として努力する人が増えたことを歴史が証明しています。

キリスト教プロテスタントにも同様の思想（予定説）があります。それは、神に救済されるか否かは生まれる前から決定されており、この世で善行を積んだかどうかは関係ないというものです。ならば、現世は堕落して生きようという輩が増えそうですが、マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、この予定説こそが資本主義を発展させたと主張しています。つまり、予定説の下で、人々は「神に救済される予定の人間は、禁欲的に職業に励むはずである」と考え、皆そのように行動したのです。そして、禁欲的に職業に励んだ人間は結果として富を残し、人々はその富を救済された人間の証拠であると考えたのです。こうして富が蓄積し、それが再投資され、資本主義が発達したとヴェーバーは考えたのです。

もちろん、他力思想では、阿弥陀仏は全員を救い摂ると誓願しているのに、予定説では、神に救済されない人も予定されているのですから、二つは別の思想ともいえます。しかし、人間が主観的に意図することと、客観的な結果が、不思議にも逆になることは歴史上多くあることは事実です。一倉氏が、環境整備による「精神革命」と言っているのはこのことかもしれません。いずれにせよ、環境整備によって、社員や組織が革命的によくなることは間違いなさそうです。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 生活態度 | 目的 | 神仏の意思 | 往生・救済の証 | 結果 |
| 他力思想 | 念仏 | 往生 | 摂取不捨（全員） | 行住坐臥念仏 | 平等 |
| 予定説 | 職業的禁欲 | 救済 | 救済の予定（一部） | 禁欲→富、富→救済 | 格差 |